

我が國史と吐蕃との關係

寺 本 婉 雅

目 次

- (一) 天平時代の外交史と吐蕃との關係
- (二) 我國「大日經」の將來と吐蕃との關係
- (三) 善無畏三藏の名義は吐蕃語の音譯か
- (四) 兜跋毘沙門天像と吐蕃の六字眞言
- (五) 韓半島史上の吐蕃の文獻
- (六) 平安朝末期將來の吐蕃語の西域地圖
 - (1) 西域地圖冠頭の吐蕃語歸敬文
 - (2) 吐漢對照西域地圖二十二國名
 - (3) 吐漢對照西域地圖解題
 - (4) 西域二十二國の地圖(原靈紹寫)
 - (5) 吐漢對照西域地圖吳書の文
- (七) 吐漢對照西域地圖の傳來考

已 上

(一) 天平時代の外交史と吐蕃との關係

古代日本史と吐蕃國との關係に就ては、何人も今日まで全然無關係の狀態であつたと思はれて居たのである。しかし我が古代史の文献を調査するに、天平勝寶年間には、既に日蕃兩國の政治的關

係に於て交渉の有つたことを物語る史料の殘存するを見る。それは極めて微弱であり、間接の事情に依るもので、直接的交渉でないとしても、兩國間の交渉の最初であつたことは否むことは出来ない。是に由て從來までの東洋史、宗教史研究上の見方に就て、或立場を變更せなければならぬ新しい場面の展開に遭遇する。

日蕃兩國の關係は我が遣唐使以來、高麗半島より大和朝に及び、奈良平安朝を経て鎌倉時代の蒙古來襲に及ぶまでの史的關係を叙述したいと思ふ。

推古朝に聖德太子出世以前までの日本は、吾等祖先の殘せる神話の形式的表現を以て祭政一致の基準とし、巫祝祈禱を以て國家の要務なりと見做せる職業的神祇官の爲めに、日本國體の眞義は沒却せられ、内には諸豪氏族の地方割據的威勢は、天日の光を掩ひ、將に皇室の中心を失はんとしたのである。之が爲めに久しく對外的に支那の冊封を受くるの形となり、「隋書」には「倭王朝貢」の文字さへ見るに至つた國勢であつた。是に由て聖德太子は國權を回復し、國威を中外に宣揚せんとして内の諸豪氏族を統一し、皇室中心の基礎を堅め、外には對強的外交を進め、隋朝に使節小野妹子を派して、對等條約を締結せられたのである。「冊府元龜」卷九九七(左十二)には當時の日隋外交の狀況を殘してある曰。

「隨倭國王多思、此煬帝大業三年(A. D. 607)遣使朝、使者曰、聞海西菩薩天子、重興佛法故、遣

朝拜兼沙門數十人、來學佛法、其國書曰、日出處天子致書日沒天子、無恙云々、帝臨見之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮、勿復以聞。」

聖德太子は遣唐使と共に留學僧十數人を派し、佛教研究に依つて日本民族發展を企圖せられたのである。此時代には吐蕃國は同族割據して未だ一國の統制にまで進歩せず、隋朝とは政治的關係を結んでゐない。従つて日蕃兩國の史的關係も出來ないのである。

その後二十七年を経て唐太宗貞觀八年(A. D. 634)に西藏開國の英主特勒德蘇隴贊甘普(Khri-Ido Sroñ bTsan-Sgan-po)は唐太宗と同盟を結び、同十五年(A. D. 641)に文成公主を迎へ、唐の佛教文明を輸入した。「大唐西域求法高僧傳」上卷(義淨著 正統第二)によれば、「唐使王玄策は勅を奉じ、西藏拉薩(Lhasa)に入り、王妃文成公主の保護に依て印度に使用するを得た。それと同時代に沙門玄照法師も入笠の途次、路を吐蕃に求め、文成公主の庇護を受け北天竺に出づることを得たのである。」「求法高僧傳」卷上に玄照の入笠の旅を記して曰。

「沙門玄照法師は大州仙掌の人也。初め梵語を學ぶ、是に於て仗錫西邁し、想を祇園に掛け、……觀貨羅を過ぎ、遠く胡疆に跨り、吐蕃國に到り、文成公主の北天に送往を蒙り、漸く闍蘭陀國に向ふ。未だ至らざるの間、長途險隘にして賊の爲めに拘せらる。……後ち耶爛陀寺に之き、留住三年に及び、勝光法師に就て中、百論等を學ぶ。

後ち唐使王玄策の歸郷に因て表奏して其實德を言ふ。遂に降勅を蒙り、重て西天に詣り、玄照を追ふて入京す。路は泥波羅國に次で王の發遣を蒙り、送つて吐蕃チベットに至る。(玄照は)重ねて文成公主を見て、深く禮遇を致し、資を給ひて唐に歸らしむ。是に於て西蕃を巡陟し、而して東夏に至り、九月を以て而して苦部を辭し、正月便ち洛陽に到る、五月之間、途は萬里を経たり、時に麟德年中なり」と。

麟德年中とは、麟德元年は高宗の代にて西紀六六四年であり、同二年(A. D. 665)にて終り、玄奘三藏の示寂の年である。後ち玄照法師は再び勅を奉じ、入笠の途に上り、黃河の上流 積石山を経て吐蕃領域に入り、印度に到つた。歸路は吐蕃を選びしも、路塞がりて通する能はず、中印度に戻り、疾を獲て旅舎に倒れた、享年六十餘歳なりと云ふ。げに佛教東漸史は幾多の求法高僧の犠牲的結晶であると謂ふべきである。

唐玄宗開元四年(A. D. 716)に善無畏三藏は吐蕃の領域を通過して來唐した。「弟子李華撰」の「大唐東都大聖善寺故中天竺國善無畏三藏和尚碑銘并序」(正史傳二、二九一頁上)に曰。

「歷迦濕彌羅國、夜次過河、河無舟梁、浮空以濟。……………至鳥場國、有白鼠旋繞日、獻金錢、講毘尼(毘盧の誤?)於突厥之庭、而可敦請法。……………路出吐蕃、與商旅周次、夷人貪貨、率衆合圍、乃密爲

心印、而蕃豪請罪、到中國西境。……以駝負經、至西洲、渡河。……詔僧若那、及將軍史憲、

出玉門塞、表以候來儀。……開元二十三年十一月七日(A. D. 735)右脇累足、涅槃於禪空、享齡九

十九、僧夏八十、法界悽涼、天心震悼」

「弟子李華撰」の撰文「玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚行狀」(大正版史傳二、二六〇頁上)には前の撰文と同様であれ

ど、三藏が吐蕃國の領域を経過して來唐した記事はない。「三藏和尚碑銘並序」に據つて書いたと謂

はる、「宋高僧傳」卷第二(大正版史傳二、七一四頁中)には、「三藏は吐蕃に路を取り、商旅と同行し、胡人の危害

を免れ、蕃豪罪を請し、大唐の西境に至り、西洲に至り、河を陟る。開元四年丙辰 梵夾を齎ら

し、長安に到り、勅して興福寺南院に安置す。開元十二年駕に隨ひ入洛し、復詔を奉し、福先寺に

於て大毘盧遮那經を譯す、其經梵文を具足し、十萬頌あり、所出のものは其の要を撮るのみ、大毘

盧遮那成佛神變加持經と曰、七卷なり、沙門寶月譯語、一行筆受す。開元二十年西域に還らんこと

を求む。優詔許されず、同二十三年乙亥十一月七日(A. D. 735)に奄然として化す、享齡九十九、僧

臘八十。……同二十八年十月三日 龍門西山廣化寺之庭に葬る」とあり。

撰文中の「西洲」とは、「西洲志殘卷」(燉煌石室遺書)によれば、

「又案西州本高昌、貞觀十四年、平高昌置西州都督府、並置縣。天寶元年改交河郡。乾元元年復爲

西州、貞元六年陷于吐蕃、大中五年沙州者領張義潮逐。」

とあり。蓋し唐の鄯州は今の西寧にして、唐の西州は今の吐魯蕃と爲す。今西寧より吐魯蕃に至る計程三千餘里」とある如く、西州は現今の中央亞細亞の燉煌の西邊に位する。唐代に吐蕃の領土に收められ、吐蕃の文化は普及し、吐蕃語による漢字の音譯さへ行はれた〔吐蕃對音千字文殘〕。

善無畏三藏が吐蕃の領域を通過して來唐〔開元四年〕、開元二十三年〔A. D. 735〕に示寂せし、後十二年を経て、唐玄宗大寶十三年〔A. D. 753〕に、我遣唐使大伴古麿が玄宗皇帝の朝殿に於て、日本使節の式次第が新羅や吐蕃の使節の下位に置かるゝことの不當なるを抗議し、將軍吳懷實の取計ひに依つて日本使節を大食國の上位に置き、新羅を吐蕃使の下位に置くやうに變更せられた。此時初めて日本史と吐蕃國との政治的關係を開始することになつたのである。當時の日唐兩國の外交は、我が遣唐使の強硬的外交によつて、我が國光を亞細亞大陸に顯揚せし努力の趾を推知せらるゝであらう。「續日本記」卷十九の孝謙天皇天平勝寶六年〔唐玄宗帝〕正月の條に、遣唐副使大伴古麿歸朝復命の上奏を載せて次の如く言へり。

「大唐天寶十二載〔天平勝寶五年〕歲在癸巳。正月朔。百官諸蕃朝賀。天子於蓬萊宮含元殿受朝。是日以我次西畔第二吐蕃下。以新羅使次東畔第一大食國上。

古麿論曰、自古至今、新羅之朝貢日本國入矣。而今列東畔上、我反在其下。義不合得。時將軍吳懷實見知古麿不肯色、即引新羅使次西畔第二吐蕃下、以日本使以東畔第一大食國上。」

推古朝に於て聖德太子が隋朝との外交史上に於て、對等の國際關係よりも一步進めて優越的國光の顯揚に努められてたのであつたが、「日本國」といふ確定的國名を以ては外交上には認められてゐなかつたやうである。支那の「冊府元龜」卷九九七(右十二)によれば、

「隨倭國王多思此煬帝大業三年、遣使朝。使者曰、聞海西菩薩天子、重興佛法故、遣朝拜兼沙門數十人來學佛法其國書曰、日出處天子致書日沒天子無恙云々。帝臨見之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮、勿復以聞。」

隋の煬帝時代には、「日本」てふ名義は倭國と同種異名として、其の位置が東方日の出づる邊にあるを以て斯く名けられたるものとして取扱はれ、我邦も當時は「大和國」と名乗つてゐたのであるが、聖德太子時代より「日の出づる處の天子」といふ意味を以て「日本」を國名とせられたのである。それまでは外國よりは倭國の名を以て稱せられてゐたのである。その事は「冊府元龜」卷三九六六の「外臣部」(十三左)に出てゐる曰。

「日本國者倭國之別種也。以其國在日邊故、以日本爲名。」

その後天平勝寶六年即ち唐玄宗皇帝(AD 754)に至つて我國は唐と對等の外交を結び、吐蕃、新羅、大食國に對し「日本國」として外交史上に確認せしめたのであることが知らる。

(二) 我國「大日經」の將來と吐蕃との關係

その後五十年を経て桓武天皇延暦二十三年五月二十一日、即ち唐德宗貞元二十年(A.D. 804)に空海は入唐の途に上り、海路三千里、蘇州より衢州に轉し、長安に入るの手續の爲めに五十八箇日其處に滞在し、州司の厚意に依り、長安入の勅許を得て、漸くにして長安に到着した。その間大使賀能大夫達は向きに歸國した。維時に延暦二十四年である。空海は橘大夫等と階に留學を許され、青龍寺の惠果大阿闍梨に師從し、胎藏金剛兩部秘密法を學び、毘盧遮那、金剛頂等二百餘卷を讀み、大同二年(平城^帝)即ち唐憲宗元和二年(A.D. 807)に本國に歸つた云々と「御遺告」文に出てゐる(弘法大師全集^{第七卷二四九})。この文中には空海が平安都府に到着した年月は記してゐない。是は空海の入唐解纜は善無畏三藏が玄宗開元四年に來唐した後八十九年にして、三藏示寂後七十年に相當する。

「大唐青龍寺三朝供奉大德行狀」(大正版史傳二、^{二九五頁})には「建中二年(唐德宗^{A.D. 781})に新羅國の僧惠日は本國の信物を將て和上に奉し、胎藏毘盧遮那の授與を求め、胎藏金剛界、蘇悉地等の授を求め、授記を得て精進の後本國に歸り、廣く大教を弘む」と。

又

「同年に新羅國の僧悟眞は胎藏毘盧遮那と、諸尊持念教法等を授かり、貞元五年季(A.D. 789)に至り、中天竺國に往き、大毘盧遮那經梵夾と餘經とを齎らし、吐蕃國に於て身没す」と。

同大德行狀記に空海の入唐を記して、

「貞元十九年日本國僧空海は奉勅し、摩訶及び信物五百餘貫文を將ち和上に奉上す。盡く將て道場を修飾し、供養し、求めし大悲胎藏、金剛界、併に諸尊瑜伽教法、經五十本を授かる」と。

この貞元十九年(A. D. 803)とは、空海入唐途上の年を指示す。されど「御遺告」に延暦二十三年五月十二日(A. D. 804)に入唐の途に就くとある文に比較して其處に一ケ年の差異を生ず。

空海が入唐(延暦二十三年 A. D. 804)つ、大同二年(平城帝 A. D. 807)に歸朝す(御遺告 參照)と云ふ、長安留學三ケ年の間に於

て、新羅の僧惠日は二十三年前に惠果阿闍梨に師事して胎藏、金剛界や毘盧遮那經を授かつて本國に歸つたといふ事を師惠果から聞かなかつた筈はなからうと思はれ、又十五年前には新羅の僧悟眞が惠果和尚に師從し、胎藏界、毘盧遮那經等を授かり、眞元五年季(A. D. 790)に中天竺國に往き大毘盧遮那經梵夾等を齎らし、吐蕃國に於て身沒したといふ求法の犠牲者が惠果の門下から輩出したことを、師又は師の門弟から聞かされない事はなからうと思ふのである。併し斯る記事は空海の歸朝後に於ける旅行記、或は遺書の中に記して殘してゐないから、確かと推定することは出来ないのである。併し新羅の惠日や悟眞が同一師匠たる惠果阿闍梨から大毘盧遮那經や、金胎兩部曼荼羅の秘法を授かつて、惠日は新羅に歸りて弘通し、悟眞はそれらの秘法を授つて後ち、入竺し、吐蕃にて身沒せりとの史實を設ひ師から直接聞き、諸門弟から聽かされたとしても、空海は歸朝後、かうした密敎の血脉相承傳を記して殘すやうな寛大な心を有してゐなかつたかと疑はれる事情が存す

のである。そは空海に取つては惠果阿闍梨より眞言の血脈相承を授かり傳へたものは一行の外には空海のみで、餘には何人も授かつてゐないとする新興宗派的感情から、空海をしてさうさせたのであると思はれる。「遺告眞然大德等」〔弘法大師全集〕第七、二八三に斯る空海の宗派的感情の片鱗が洩らされてゐる曰。

「若存灌頂者、自我身始、秘密眞言此時而立。夫師資相傳、嫡々繼來者、大日金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、惠果。仁勸付法、至于吾身、相傳八代也。」

新羅の僧惠日が惠果阿闍梨に師從し、金胎兩密や、大日經等を授かつて、「諸尊瑜伽三十本、已來授記、精通、後時却歸本國廣弘大教」とあるから、餘程惠果に信ぜられた精進の比丘であつたであらう。加之彼は師から師名の一字を割いて「惠日」といふ法號を附せられてゐたことを考へても、彼は惠果から大日、金剛薩埵等の嫡々相承を繼いだもので、歸新後は彼も又眞言の灌頂に於て「相傳八代」なりと宣言して新興宗教としての密教を新羅に弘通したことであらう。惠日の新羅國に於ける眞言密教開宗は確かに空海より約二十三年以前の事に屬する。朝鮮佛教史上に於ける惠日の史傳は爰に略する。空海は自己の先輩者として惠日や悟眞の密教繼承者たることを惠果和尚より聞かない筈はない譯であるが、歸朝後新宗派を開かんとする企圖を抱ける空海に取つて、日本への朝貢國としての新羅の僧達、自己より以前に既に眞言密教の灌頂を受けて嫡々相承の新宗を開いて

ゐると云ふ事を傳記せなかつたことは、左もあるべき事であらうと思はれる。従つて悟眞が惠果の室を離れ、大日經の原本を求めに入笠して、吐蕃國に於て死んだといふ史實は、空海入唐前僅かに十五年であるから、かうした求法的歿教者が惠果の門弟より出たといふことは師より聞かされたことであらうと推考する。只空海の遺書中に這般の消息の洩らされてゐるのを遺憾とする。

空海入唐の動機は「御遺告」によれば曰。

「夢に人あり告て曰、此に經あり、大毘盧遮那經と名く、是れ(汝の)要むる所のものなりと、即ち隨喜し、尋ねて件の經を得たり、大日本國高市郡、久迷の道場の東塔の下に在り。此に於て一部緘を解き、普覽するに衆情滯あり、憚問するところなし、更に發心して去る延暦二十三年五月十二日を以て入唐す」とあり、「弘法大師年譜」卷二にも同様の文出づ。とにかく大日經を久米の道場東塔下に於て發見し、譯經中の多數の梵音陀羅尼の眞義不明に就て、經意を研究せんとしての動機が基となつて、三十一歳のとき奉勅して入唐されたのである。

大日經の傳來や、久米道場の東塔のことに就て、善無畏三藏が來朝して塔を建て、塔下に秘納しておいたと云ふ傳説が可なり有力に傳へられてゐる。そは「久米寺流記」云、(弘法大師年譜卷二)

「此塔者多寶大塔八丈也、遷南天鐵塔之半分、以善無畏三藏基立之(日本最初多寶大塔也)、件三藏……依東

土邊州利益之願、寶持大日經、獨入_ニ鳥卵馬臺之國……

三藏普蹈_ニ回四瀛八紘焉、求_ニ七軸安置之場_ヤ大日本國_ニ、高市郡王舍側此地、尤足_レ禰美。仍盧東院之軸。而三箇年七百二十日際、起立一寶龕而號_ニ之東塔院。卽以_ニ三粒之佛舍利、納_ニ寶石之底。又以_ニ七軸之大日經、安_ニ剎柱之下。』

又曰、

「世言無畏齋毘盧遮那經、入_ニ我國、時乏_ニ資稟、藏和之久米寺而去、後七十年空海遭_ニ靈感、得_ニ此經云々。』三藏が「大日經」を將來し、久米寺の東塔下に納めて而して歸唐後七十年にして、空海は大日經を發見したといふに就て、三藏歸唐後七十年と云ふ年數を逆算すれば、それは聖武天皇天平七年卽ち唐玄宗開元二十三年(A. D. 735)に相當す。而して三藏の來唐は開元四年(A. D. 716)卽ち元正天皇靈龜二年にして、三藏の示寂は開元二十三年であると云ふことは、「弟子李華撰」の「玄宗朝翻經三藏善無畏贈鴻臚卿行狀」(正史傳二、二六〇頁上)や、同「李華撰」の「大唐東都大聖善寺故中天竺國善無畏和尚碑銘並序」や、「宋高僧傳」卷二(正史傳七、七一四頁中)等にある史實である。「弟子李華撰」の「善無畏三藏碑銘並序」は「貞元十一年歲次乙亥四月戊戌朔十七日」(A. D. 795)であり、三藏示寂は「開元二十三年十一月七日」(A. D. 735)であるから、「李華撰」は三藏示寂後六十年を経過した時代の作撰である。是に由て設ひ李華は三藏の弟子であつたとしても、其の選文は晩年の作である。併し若し三藏が日本

に渡來したと云ふ事が事實であつたならば、李華は三藏の碑銘にかゝる傳敎上重大なる史實を洩らすやうなことはなからうと考へらる。斯く考へ得るならば三藏の大日經日本將來といふことは、一の傳説に過ぎないのは言ふまでもなからう。但しかうした傳説に由て起る所以は、恐らく玄昉僧正が入唐して一切經を將來したと云ふ傳説から孕んだ稗史であらう。

兎に角善無畏三藏の譯した大毘盧遮那經が三藏示寂後餘り年數を経過せない時代に何人かに依て將來され、それが久米寺の學僧達の秘藏書として東塔下に納められてあつたものが、幾星霜を経て久米寺の住持の更代するに伴ひ、誰もその經典を取出して讀むものがなかつたものと思はれる。塔には「ストウツバ」と、「チャイトヤ」との二種あり、前者は舍利卽骨を埋めて供養するもので、印度の「バルフート」や「サンチ」の佛舍利塔などは代表的のものである。後者は佛陀の遺物や、經典などを藏めて尊重供養するもので、多寶塔の如きはそれである。今久米寺の東塔は多寶塔であると言ふことであるから、久米寺の先住の誰かに依て塔内に藏められた多數の聖典の中の一が大日經であつたのであらう。偶々空海の傳記者は大日經の入手を秘密的に書いて、夢中人の告に依る云々としたものであらう。

空海が延暦二十三年(A. D. 804)に入唐せし以前六十五六年頃、即ち天平年間に「大日經」等の秘密聖典は既に日本に將來されてゐた。それは「正倉院文書」の寫經目錄中に左の如くあり。

天平六年六月の條に、「理趣經」二卷。同六年九月の條に、「理趣經」一卷とあり。「同文書」「寫經出納帳」の中に、天平八年十一月廿四日、高屋赤萬呂、九帙九十九卷の中に左の文あり。

「送金剛頂經一卷」。

天平八年九月廿九日の條に、大毘盧遮那經三卷。天平十年の條に、「理趣經」一卷。天平二十年「蘇悉地經」三卷。唐輸婆迦羅譯。「金剛頂瑜伽中略出念誦經」四卷。「唐金剛智譯」〔大日本古文書卷七寫經請本帳正倉院文書〕

此の文獻に依て觀れば、善無畏が來朝して大日經を將來したと云ふこと。併に夢中感得と云ふ如きは、一種の傳説であるが、或は何等歟の爲にする捏造説とする外に、何等史實は存せない。

空海の夢中靈感に依て毘盧遮那經を久米寺の東塔下より發見したと云ふ傳説は、何等かの説話に據つたものではなからうかと考へらる。それを想像し、聯關せしむる史料は、善無畏三藏の事に就て「曼荼羅私抄記」に、左の如く空海の夢中感得と同様の傳説が善無畏にも存してゐたと云ふことである曰。

「或記云、中天竺國輸婆迦三藏唐云善無畏、解梵王五十二代孫、捨襲王位、出家入道、中印度沙門遇達摩掬多阿闍梨、研學胎藏大教王、傳王利生誓甚深。雖然經中所說曼荼羅、如來秘密內證、顯密爲圖有恐、是以於北印度乾陀羅國、金粟王塔下、向大虛發勇猛信、祈拜末世相應曼荼羅、于時空中、此胎藏界曼荼羅炳現、彼圖流傳、是故現圖曼荼羅、並感得毘盧遮那供養法、當時所現流大日

經七卷是也。」

善無畏三藏が北印度乾陀羅國の金粟王塔下に於て大日經を感得したと云ふ傳説を基として、空海が久米寺の東塔下に於て大日經を夢中靈感によつて發見したと云ふ傳説を模造したのではないかと思はる。

(三) 善無畏三藏の名義は吐蕃語の音譯か

善無畏三藏の名義考に就ては拙稿論文「善無畏三藏名義は吐蕃語の音譯なるか」〔宗教研究〔第四〕に於て詳述して置いた。〕

「李華撰」の「玄宗朝翻三藏善無畏贈鴻臚卿行狀」には、

「三藏沙門、輸婆迦羅者、具足梵音、應云戌婆誡羅僧賀、唐音正翻云淨師子、以義譯之、名善無畏。」とあり。

「宋高僧傳」卷第二(正史傳二、七二四頁中)に言く、

「釋無畏、本中印度人也、乃梵名戌婆揭羅僧訶、華言淨師子、義翻爲善無畏。一云輸婆迦羅、此名無畏、亦義翻也」と。

善無畏の梵名、戌婆迦羅僧訶に Cūḥakārasinha の語原を當倣めてあれ(南條大明三藏目錄)ども、果して善無畏なる名義は梵語の譯語であらうか。華言に淨師子と云ふとあり、これは僧訶(Sinḥa)は百獸の王

にして、一切の百獸に畏れざる威力を有するとの意義に由て無畏と譯したのであると云ふのである。併し善無畏の譯出したと稱する聖典儀軌等の廿五種の中、輸婆迦羅といふ名稱を署名せるもの僅かに五種にして、殘二十種は皆善無畏といふ署名を記せる譯經である。そして何れの譯經にも輸婆迦羅僧訶といふ名稱を記せるものはない。三藏の本名は輸婆迦羅であつて、輸婆迦羅僧訶ではないことが譯る。従つて輸婆迦羅 (Cubhakarā) とは「善作」、「淨作」と譯出すべき梵名にして、「善無畏」といふ譯名とはならない。是に由て考ふに「梵名戌婆揭羅僧訶」、「華言淨師子、義翻爲善無畏」(宋高僧傳) とある「義翻名善無畏」とは、吐蕃語の音譯であると思ふのである。その故如何と言へば、梵名の「戌婆揭羅」、「輸婆迦羅」(Cubhakarā) を吐蕃語に直譯せば bzai-Byed となりて、其儘「善無畏」と發音せらるゝが故である。梵語 Cubha の藏語 bzai は「善」字の對譯であると共に、bzai の音譯「善」字としたのである。此の場合「善」は good, right の意譯ではなくして、bzai の音譯である。次に梵語 kārā の藏譯は Byed である。唐代の吐蕃及び吐蕃領域の燉煌、西州地方では「プエ」(畏)と發音し、吐蕃國本土では「ツエ」と發音して使用せられた。故に藏譯 Byed を音讀のまゝの方言として「無畏」と音譯し得るのである。すれば梵語 Cubhakarā の藏譯 bzai-Byed を吐蕃領域の方言として「善無畏」と音譯することは敢て不可ではないと思ふ。

「唐蕃對音千字文殘卷」(燉煌遺書第一集ベ)には、「畏」の音譯に吐蕃字 འཇིག་ (ウイ、ウエイ) の假名を附してあ

り。又漢字「弁」の音譯に Byen (ベ^hン) の吐蕃字の音を附してゐる。單に「弁」字の音譯のみを表示するものとすれば、Ben だけにて音を寫すに充分であるから敢て Byen とする必要はない筈である。それにもかゝはず語根 B に添足詞 ヲを附してゐる。これは出息氣を表示する爲めに特に ヲを附したのである。かくして漢字「弁」の音譯を Byen と綴る如く、吐蕃語の「作」、「爲」の動詞 Byed の音譯に「無畏」の漢字を當嵌めて呼稱し、梵語 Cūbhakṛa を bzai-Byed と吐蕃語に譯し、この吐蕃譯 bzai-Byed を其儘方言の「善無畏」と音譯したのである。これ三藏は吐蕃の領土を單獨に通過して來唐したるが爲めである。

吐蕃語 Byed の音譯「無畏」は方言であると云ふ、その一例證として「于闐國史」(拙著)に So-Byi と云ふ語あり、普通の讀方では「ソ・チー」である。併し國名としては「ソ・ビー」(蘇毗)である。この事は唐末の吐蕃の僧法成(Chos-Grub)は「于闐國史」の原本を漢語に譯して「釋迦牟尼如來像法滅盡之記」といふ。その殘簡が燉煌出土として發見せられ、其譯文中に So-Byi は「蘇毗」の對音であることが記されてゐる(燉煌遺書^{第一集})。これ「無畏」の對音としての Byed は亦此の So-Byi の Byi と同様の音譯であることを知る。Byed と Byi とは只母音 e と i との差である。而して吐蕃語 Byed の d は添後詞であるから基より發音を略するのである。それは佛蘭西語の語尾と同様である。

斯く考ふることに由て三藏の名義「無畏」は、吐蕃語の音譯の呼稱であることを知るべきである。

し「宋高僧傳」等に善無畏は義翻なりとする所以は、善無畏三藏が吐蕃領土を通過するに、自己の梵名を吐蕃語に譯出し、以て旅行上の危険を免れんが爲めに、吐蕃語の方言のまゝに「善無畏^{ザンブエ}」と呼稱し、且つ來唐後諸官衙、或は紳士間に使用した名片^(名)上の名義である。(宗教研究「新第八、第四號」善無畏三藏の名義は吐蕃語の音譯か)

照參

智證大師圓珍は傳教大師より善無畏三藏の畫像一軸を特に附授せられたりとして畫像の背にその由を記入したと言はれてゐる。それは「五部心觀批記」に、「此本是青龍和上手中本、分付圓珍」と云ひ次で、

「同卷末、無畏和上像。背曰、此無畏和上眞也、與采色異也、可據眞本」(「智證大師全集」第四「大」日本佛教全集「p. 120」)とあつて、善無畏三藏の畫像に梵字を以て讚を題してあり。讚文中に Cūbhakāra-siṃha (輸婆迦羅僧訶) といふ梵名が始めて文獻史料上に現はれてゐるのである。三藏が譯出せる多くの經典中には輸婆迦羅(Cūbhakāra, 善作、或は淨作)とのみあつて、輸婆迦羅僧訶(Cūbhakāra-siṃha 善無畏?)として連續せる梵名は出てゐないのであるから、圓珍が傳教大師より授かつたといふ三藏畫像のみに始めて全體の梵名が記されてゐることは尤も珍らしい事である。然し、左にその梵讚を和譯する如く、Cūbhakāra-siṃha は三藏自署の名稱ではなくして、何人かの筆蹟梵讚によるものである。而かも

この梵讚は讚頌文として餘りに意味の通り兼ねることは如何なる分けに由るものか。或は三藏畫像は唐代の模寫繪であるか、その相貌は「此無畏和上眞也、與采色異也、可據眞本」と言はしむるに至つたものであるか、併しその梵讚のは只書體は能筆者なれど、餘り梵語に熟達せないものゝ誰かゞ讚文を作つて書いたものではあるまいかとの疑念を起さしむる憾が存する。同繪像の梵讚に曰、

/ Ācārya-praṣānta-sya-pratibha da /
阿闍梨耶 寂 靜 の 前に

/ Ta-dharmā-ye-ārya-gubha 原文 ā)
其等 諸法は 聖 輪婆

kāra siha-sya /
迦羅 僧訶の(有する)

「寂靜の阿闍梨耶(師範)の前に、

聖輪婆迦羅僧訶(善無畏淨作獅子)の有するところの其等諸法は」。

三藏の名義「無畏」は此の siha (獅子)の義譯、百獸の王にして、何物にも畏れないから「無畏」と譯出したと云ふ古來よりの解釋は、かうした三藏自身の呼稱でもなく、三藏自己自身の署名でもない、弟子、又は崇敬の念に依る法脈傳承者が附呼せし讚頌的名稱に由たものであるまいかと思ふのである。

そは上に屢述する如く、「善無畏」とは梵名 Cūḥa-kāra をそのちノ吐蕃語 bzai-byed と譯出じ、

是に唐代——中央亞細亞地方の方言に依て「善無畏^{ガシブエ}」と發音したものであらう。三藏は單獨印度を旅立ち、當時吐蕃民族が一時中央亞細亞一帯を占領し、強威を四隣に振ひつゝあつた諸州を通過するに際し、旅上の危害を遁れん爲めと、吐蕃民族の住せる各驛關を無難に通過する方便の爲めとを顧慮したる吐蕃語譯の名稱なるべしと考へらる。この善無畏三藏像に於ける梵讚は「南部晋氏舊藏の古寫による五部心觀抄寫」にありて、小野玄妙氏所持の青寫眞本に據つたものである。

(四) 兜跋毘沙門天像と・吐蕃の六字眞言

京都市の「教王護國寺」の「兜跋毘沙門天」(木造着色立像 高六尺四寸)は吐蕃 (Tib-Bod: འགྲུ་པོ་ཏི་པོ་ཏི་པོ་) てふ國名を附せる毘沙門天であつて、「兜跋」は「吐蕃」と同音の異字譯であると云ふ。「日本國寶全集」に解説を施してあり。曰、

「毘沙門天と異なるのみならず、其面貌、形相、服裝等に至るまで全く特殊の様式に依り、獨尊形として拜まれる兜跋毘沙門天である。此の形相は平安朝以前に存せず、空海將來の儀軌に依りて造つたとの寺傳にある如く、當時唐土新度の様式に依り、平安京が經始せられると共に、此像が王城の鎮護として羅城門の樓上に置かれたといはれてゐる。……………此像が唐代玄宗の朝、西域より輸入され、其怨敵退散、國土鎮護の靈驗揭焉なるにより、諸道州府に安置せられたといふ古記に依れば、それが我國に傳來するもの尤の事と思はる。兜跋の稱は恐らく西域の吐蕃の轉訛

であるまいか。」

「兜跋」は「吐蕃^{テボ}」と同音であることに就て「兜跋毘沙門天像の起源」(密教學報^{密教學報}第百九十八號^{昭和三十五、三、源豐宗氏說})に考證されてゐるが、「不空三藏傳」に西蕃と大石と康との三國が西涼府を包圍したとき、不空が毘沙門天に密呪を誦する二七遍にして蕃帥を驚潰せしめたと云ふ記事あり。「宋高僧傳」卷二(正史傳二、(七一四頁上))に據れば

「又天寶中、西蕃、大石、康三國帥兵圍西涼府、詔空入、帝御于道場、空秉香鑪誦仁王密語二七遍、帝見神兵可五百員、在于殿庭、驚問空、空曰、毘沙門天子領兵、救安西、請急設食發遣。四月二十日果奏云、二月十一日、城東北三十許里、雲霧間見神兵長偉、鼓誼鳴山、地崩震、蕃部驚潰、被營壘中有鼠金色、昨弓弩弦皆絕。城北門樓有光明天王、怒視蕃帥、大奔、帝覽奏謝空、因勅諸道城樓置天王像、此其始也。」

「毘沙門儀軌」(不空^譯)にも、唐玄宗天寶元年に大食等の五國の外敵が安西城を犯したことを記してゐる。

不空が仁王經の祕呪によりて毘沙門天が吐蕃の外敵を退散せしめたと云ふ傳説に基き、我平安朝に唐の安西城地方の風俗様式を以て彫刻し、之の像を王城の樓門に置いて鎮護守神としたのであるから、普通の毘沙門天とは模様も異り、特に吐蕃兵を破つたといふ吉勝を意味せしむ爲めに日本語の

音譯として「兜跋の毘沙門天像」と稱したのである。「兜跋」といふ字音を以て「吐蕃」を呼稱してある文獻は吐蕃傳に見當らない所以は、日本人が日本語を當條める爲めに使用した文字であるからである。「兜跋」とは *Itas-Bod* （サ・ボツ） の音譯であつて「跋」は「蕃」「播」等と共に *Bod* の音譯であることは「唐蕃千字文殘卷」（敦煌遺書） （羽田氏編） 等に依て證明さるゝことは言ふまでもない。そして兜跋毘沙門天像の甲の龜紋や、寶冠や、様式は現に支那の「居庸關」の遼道内の左右兩側の壁鐫にある四天王の巨像と同一である。寶冠の如きは現に西藏喇嘛（密教）に使用されてゐるものと同一の帽子である。

吐蕃といふ名稱が、我が天平勝寶六年に國史上に現はれてより、爾來眞言密教の經典佛像の將來によりて、奈良より平安朝に及んで漸次知らるゝに至つたことは争はれない事實である。況哉眞言密教に朝夕に唱ふる「光明眞言」二十三字の中に、西藏佛教徒が朝々否日課念誦する「唵嘛呢叭咪吽」（オインヤニバド、フン） の六字眞言の含存するを見る。二十三字中最重最要の眞言は「マニハンドマ、ジンバラ」（Mani-pad ma-jyala） である。「マニ」は如意寶珠、「バドマ」は蓮華、「ジンバラ」は光明の義を詮はすといふ。西藏佛教では此六字眞言は觀音の眞言なりといふ。觀音は彌陀の化身であるから、六字眞言の意味は其儘阿彌陀佛にも通すると云ふのである。兔に角、日本眞言密教の「唵アボキヤ、ベイロ、シャナウ、マカ、ボダラ、マニ、ハンドマ、ジンバラ、ハラ、バリタヤ、吽」（Om amogha v irocana ma ha-padmi jyala, privataya） 即ち「唵、不空、遍照、大印、寶珠、蓮華、光吽」は、西藏喇嘛教の眞言

呪文と同一であることは疑ふべくもない。その諸種の眞言呪文中に、此の六字眞言の含まれてゐるより觀れば、日藏兩眞言密教は密接の關係を有してゐることが解るであらう。

(五) 韓半島史上の吐蕃の文獻

我鎌倉初期に於ける政活思想史と吐蕃との文獻的交渉は、別項「平安末期に於ける吐蕃語の西域地圖」に就ての研究文中に叙述しておいた。當時の佛敎學者や高僧達は、東洋史殊に翻譯史に關する高僧傳を繙くにつれて、吐蕃又は西蕃などの國名に接することあるにしても、吐蕃は今日云へる西藏國、即ち佛敎國(秘敎國として)であると云ふ如き考へを以て讀んでゐたのではないので、只吐蕃は月支國と關聯する印度、又は印度の一部領域であると思ふてゐなかつたのである。親鸞聖人が「敎行信證」を製作されたとき、其序文に「愚禿釋の親鸞、慶哉、西蕃、月氏之聖典、東夏日域之師釋に遇ひ難くして今値ふことを得たり」と記されてあるが、この「西蕃月氏」は眞宗の宗學者の定説では、印度國を指示されたもので、それは「東夏日域」の對句としての記述で、吐蕃國を意味するものではないと云ふのである。併し東洋民族史上では、西蕃は唐代に於ては確かに吐蕃民族の一支族の名であることは疑ひない。開元十五年西安府に還つた新羅國の慧超の「往五天竺國傳」(正史傳二) (七七八頁)に

「君恨西蕃遠

余嗟東路長

道荒宏雪嶺

險澗賊途倡

鳥飛驚峭嶺

人去偏梁頭

平生不捫淚

今日灑千行。」

とありて西蕃は吐蕃族の支族名であるから。慧超は亦「同傳」(九七頁)に「吐蕃國住永山、雪山川谷之間、以氈帳而居、無有城郭屋舍……國王百姓等總不識佛法、無有寺舍」と記してゐる。唐代には西蕃は吐蕃族の一支族名であることは疑のない史實である。「大唐西域求法高僧傳」上卷(正史傳二頁下)に、玄照法師は再度印度より吐蕃國に到り、文成公主の庇護を受け、西蕃地を巡陟して東夏に至りて歸唐した記事を残してゐる。曰、

「玄照は重て文成公主を見て深く禮遇を致し、資を給ひ、唐に歸らしむ。是に於て西蕃を巡陟し、而して東夏に至り、九月を以て苦部を辭し、正月使ち洛陽に到る。五月之間、途は萬里を経たり、時に麟德年中(A.D. 664)なり。」

西漢時代には、西蕃は今の東部西藏の德格^デ格地(Sie-dge)に居り、吐蕃は本土に住した。秦時代には西蕃は洮湟の積石山の西南地方に住し、唐代には「宋高僧傳」卷二に、

「又天寶年中、西蕃、大石、康三國、帥兵圍西涼府、詔(不)空(金剛)入帝御于道場。」

とある如く、「西蕃」とは吐蕃民族の一支族名であることが知らる。「續日本記」の六國史には「大食、吐蕃、新、日本」とあつて、吐蕃てふ語は國名として使用せられてゐる。近代支那人が吐蕃とは、「吐」といふ種族であり、「蕃」は野蠻を意味するものであると云ふ僻見は史實を誤るもので、「吐蕃」とは西藏語 Tsis-Bod (tis-Bod, Tebod) の韻稱であら、Tsis (吐) Bod (吐・豐) は Tis-Bod と發音し、

之を唐音に「吐蕃^{トット}」と對譯したのである。故に西洋學者の Stod-Bod (上方の Tibet) より成れると云ふ説は不可なるは言ふまでもない。

當時我が外交史上に於て、吐蕃國が我國と關係を有したのみならず、新羅國もまた同様に唐朝を通じて吐蕃と關係を有したのである。「三國遺事」卷第四(大正版傳一、一〇〇五下段)によれば、慈藏法師は唐の貞觀十七年に入唐し、朝覲は吐蕃の上位に列したと云ふ、曰。

「大德慈藏……受勅與門僧實等十餘輩入唐、……乃以眞德王三年己酉始服中朝衣冠。明年庚戌又奉正朔、始行永徽號。自後每有朝勅、列在上蕃藏之功也。」

「新羅國の僧悟眞が唐貞元五年季(A.D. 789)に中天竺に往き、大毘盧遮那經の梵筈と餘經とを得て歸途吐蕃國に於て身沒し」(「大唐青龍寺三朝供奉大德行狀」前引)した史實などは韓半島史上に於ける吐蕃文獻である。

又高麗朝に元使に依て鑄造せられた梵鐘一箇は、京畿道開城郡、松都西南本町南大門にあり、それは高麗忠穆王二年丙戌(日紀二、千六年)の時である。現在は開城府樓門に在り。即ち「資福寺鐘銘」に據れば曰、

「大元至正六年春、資政院使姜公金剛。左藏庫、副使辛侯裔奉天子之命、以金幣來、鑄鐘于金剛山、時旁山諸郡饑、其民爭趨工。彼食以活鐘成。公將歸朝。國王公主謂臣僚曰、金剛山在吾邦域之中、令聖天子遣近臣所以張皇佛事、無之無窮者、如此而吾靡有絲毫補盍圖所以報上者僉曰、演福寺大鐘久廢不用、今因功活之、來而更鑄之、亦足以體上之意、而爲不朽之功矣。遂言之公、

公欣然曰諾輟行以成之。……」

この鐘銘の文は、「館事上護軍臣李穀撰」とあり。此の漢銘を中心として其の上下の一巡には梵藏對照文の陀羅尼を鐫刻してあれど、梵藏對照の文撰者の氏名を記入してゐないから、そは何人の手蹟であるかは不明である。只漢銘の最後の處に僅かに「龍金和尚譯語陶得明」の文字を残存するのみである。（「朝鮮金石綜覽」上四九〇—四九三頁）

惟ふに此の鑄鐘は元朝の侵略兵戰によりて高麗國が多大の兵害にかゝり、夥しく人命を損ねたが爲めに萬靈供養の意味を以て元帝の勅命に因て鑄造したものであらう。鐘高さ九尺六寸、同徑六尺一寸、字徑六分、楷書であり、梵藏對照文は鐘胴一巡して陽刻されたる呪文のみで、同一呪文の繰返しに過ぎない。呪文は上下二段一巡のもので、上段は梵字の蘭查體のみにして、下段は梵字蘭查體と西藏字文との對照である。上下二段共に同一呪文の重復の刻文である。左に其の呪文と和漢とを併舉す。

// oin Amogha-siddhi ah svāhā /	唵 不空成就、阿不、蘇訶。
/ oin Samantabhadra sou svāhā /	唵 普賢、蘇牟、蘇訶。
/ oin Arapacana dhi svāhā /	唵 アラパチャナ、提不、蘇訶。
/ oin Cintā mahārocaṇa Huiṇ phat /	唵 思惟大盧遮那、呬、發吒。

/ oin Vairocana Oin svāhā / 唵 毗盧遮那、唵、蘇訶。

/ oin Akṣobhya Huin svāhā / 唵 阿闍、呼、蘇訶。

/ oin Ratna-sambhava Hīh svāhā / 唵 寶生、不唎不、蘇訶。

/ oin Amitabha Hīh svāhā / 唵 阿陀陀跋、不唎不、蘇訶。

以下は是れと同一の呪文が反覆されてゐるに過ぎないから略することゝせむ。

(六) 平安末期將來の吐蕃語の西域地圖

茲に尤も珍らしき吐蕃語の文獻史料が我が鎌倉初期に傳來されてゐることである。それは西域地方の國名を圖式し、その各圖式の中に吐蕃語と漢名との對譯を記入し、各圖式は極めて素朴的な方形、長方形、不整方形などに描かれたものである。

吐蕃語は有頭文字と無頭文字との二種を以て書かれ、何れも唐代の中央亞細亞地方よりの出土文體に似てゐれど、吐蕃文字に經驗のない入唐僧の手によりて將來された地圖であるが、その後數人の手に依て幾度か轉寫されたが爲めに、地圖の冠頭の歸敬序の文字は有頭文字の行書體にて書かれてゐるから判讀するを得れども、各圖式中の國名は無頭文字の草書體であるから甚だ判讀に苦しまれるのである。

此の西域地圖は、唐代に於ける中央亞細亞と印度、波斯、吐蕃の諸國との交通を圖式するに際し

既に唐代に知られてゐる西域地方の各國名が漢音にて示されてゐるものに據りたもので、是等の漢字音の國名に更に吐蕃語の音譯を附し、漢吐對照の國名とし、以て吐蕃人の通覽に便宜ならしめんとするの意圖に依て製作されたものと思はる。恐らく西域地圖は吐蕃の開國王蘇隴贊甘普 (Sro-b-Tsan Sgam-po) が貞觀十五年 (A. D. 641) に文成公主を迎へ、後ち棄德贊 (Kliri-t-de-b-Tsan) は玄宗と開元二十一年 (A. D. 773) に唐蕃會盟碑文を西藏拉薩市に建てたまでは、吐蕃の國威は中央亞細亞全帯に及んでゐた時代であるから、其の時代に於ける吐蕃人が政治的領土統制の用に充てんが爲めの製作ではなからうか。この引寫の用紙は平安朝末期か、若は鎌倉初期のものであるやうに思はれる。この地圖の傳來、相傳、引寫等の事情に就ては下に至つて述べることにする。

(1) 西域地圖の吐蕃語歸敬文

/ oñi vajra-krodha /	/ Mahā-pāla hanana /
唵 金剛 忿怒よ	大 護よ 破壞よ
/ hāpāna (原文hāpa) /	/ bhid-dvān (原文dvan) sayā(?) /
拋棄よ	破壞せよ (汝が?) 縛せよ
/ Cani(?) — lam (?) /	/ Potala / Uḍḍa Cus krodha /
	普陀洛 泉(池)を乾燥す忿怒よ
/ Huin /	/ Phaṭ-svāhā /
唵	嚩託 薩婆訶

(2) 出神島臨國寶圖 二十二圖

1	拔漢那	Prahaya-nan	拔汗那, 鐵汗國。
2	薩(蜀?)賓	kin-hin	蜀賓國。
3	大石	Tha-ku-sha-si	咀叉始羅國。
4	大突厥	Taha Thor-kus	大突厥國。
5	拂林	Pu-lim	大秦國。
6	舍衛	Sha-he	印度舍衛國。
7	胡國	kuo-kuo	活國。
8	Ya-mah (ghah?)	yan-ga (yangam?)	淫薄健國。
9	古論	Ko-ron	屈浪拿國。
10	跋藍	Prai	
11	Pa-ra-lo 中天	pa-la-lol	鉢露羅國。
12	鬱延	Tha-han	大宛(?)。
13	波斯國 昆論在此	Pa-sin-go	波斯國。
14	葛々斯	Ped-she-lā (pitāselā?)	屈多勢羅國。

15	問	Moin (Mangali)	曹揭盤城。
16	瓜	國	瓜州(沙州；沈敦煌鎮)。
17	吐	Po (Bod)	吐蕃國。
18	逮	Kin-ku-ko	點憂斯古堅昆國。
19	廻	Hior	畏兀兒國。
20	唐	Thau	唐朝。
21	入	蠻	高麗、真臘、波斯、吐蕃、堅昆、突厥、契丹、靺鞨。

(3) 吐漢對照西域地圖解題

- (一) 拔漢那(邪?)……「唐書·西域列傳」第一四六、下五丁に曰、「寧遠者本拔汗那(Prahayana : pahan-na?)、或曰鑠汗。元魏時、謂破洛那。去京師八千里、居西韃城、在真珠河之北。」
「漢槃陀國、正在須山、自葱嶺以西水皆西流、世人云、是天地之中。土人民決水以種、聞中國、待雨而種笑曰、天何田可朝也」(卷一三〇左)。
(二) 罽賓……「隨漕國也、居葱嶺南、」(唐書第二百二十上、二八丁)
(三) 大石……「咀叉始羅國」(Taksasila)

(四) 大突厥。

(五) 拂林……「拂林古大秦也。居西海上，乃至西瀕海，有遲散城，東南接波斯地方」〔唐書〕西域列傳第一四五卷下、二丁。

(六) 舍衛國。

(七) 胡國……「胡國・活國 (Hwo-ko) 卽觀貨邏國故也」〔西域記〕卷一、六頁。

(八) Yai-ga 國……「淫薄健國 (Yangam) 起觀貨邏故地也」〔西域記〕卷一、九頁。

(九) 古論……屈浪努國 (Kurana) 〔西域記〕卷一、一七頁。

(十) 跋藍……西曹者隋時曹也，南接史及波覽。〔唐書〕卷二二、下三丁。

(十一) Pa-ra-to 國……鉢露羅國 (Palolo; Bolor) 〔西域記〕卷一、四頁。

(十二) 鬱泥……大宛國。〔大宛國王治貴山城〕〔漢書〕西域傳補註記卷一、三三丁。徐松學著。註曰，齊民要術引陸

機與弟書曰，張騫使外國，十八年得苜蓿歸，大宛傳作取其事實。

(十三) 波斯國……「大食本波斯地。男子鼻高黑，而女子白皙，出輒鄣面，日五拜天神」〔唐書〕南蠻列傳第一四下五丁。

(十四) 葛々斯國……「臂多勢羅國 (Pisilia) 〔西域記〕卷一、四頁。

古堅昆國也」とあり。〔唐書〕回鶻列傳卷一四二に「點戛斯、

(十五) 問國……揭曹釐城(Mungale?)〔西域記二〕(卷三、四頁)。

(十六) 瓜國……燉煌は春秋時代は瓜州と稱す。蓋し此地より美瓜を生ずるからである。漢以前には月支族は此地に據る。漢は元鼎六年〔西紀一〕(一一一年)に酒泉郡を分て燉煌郡を置けり。爾來燉煌鎮とも、或は古名の瓜州とも、沙州、西沙州とも稱した。唐の建中二年に吐蕃の爲めに陷滅され、宋の景祐の初に西夏の領するところとなつた。

(十七) 吐蕃國……唐代の西藏國。

(十八) 逮混國(Kin-kun-ko)……「點夏斯、古堅昆國也、當伊吾之西、焉耆北、白山之旁。或曰居勿」〔西域記「骨鵠列傳」(卷一四二、一二頁)。

(十九) 廻骨國……畏兀兒國。

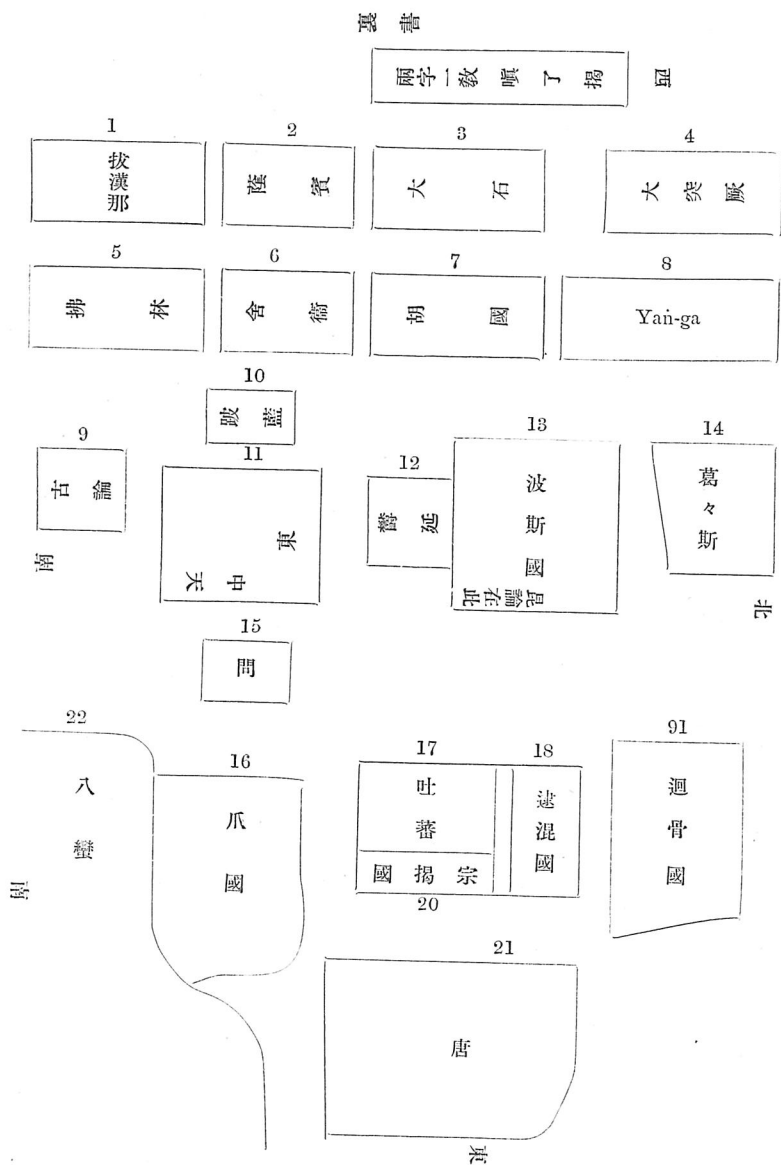
(二十) 宗揭國……支那甘肅省 西甯府の西南一日里程、タンガル丹格爾城(青海の入口)より流る河名にして、宗揭とは吐蕃語 Tsou-kha (葱畑)の對音なり。唐古忒族タシカト(吐蕃の一族)の住せる地方なり。

(二十一) 唐國。

(二十二) 八蠻……「東至高麗、南至眞臘(Shiam)、西至波斯、吐蕃、堅昆、北至突厥、契丹、靺鞨、謂之八蠻。」〔唐書〕(卷二)下。

(4) 西域二十二國の地圖

吐漢對照西域地圖 (原圖縮寫)



(5) 吐漢對照西域地圖與書の文

「以實相坊御本一勘了。凡此繪樣、梵字等不分明也。後此兩本、但不分明也。俱如本云々、眞圓記。重以藏本交了、但不及力、字者無術之、眞圓記。」

「正治二年閏二月二十七日、以大寶院御本書之了、二交了。

禪覺記之。

裏書

承久二、十二月二十六日、御藏本一校了。圓淨記。」

(七) 吐漢對照西域地圖の傳來考

禪覺の移寫したる西域地圖

(奥書云、正治二年閏二月二十七日)

の研究に就ては、余は大正九年十二月松本文三郎博士

の依頼を受け、博士所藏の同地圖を研究して報告書、併に引寫を添へて呈出した(同十二月十日附)。博士の

は紺色の表装にて成れる軸物にして、紙質年代は鎌倉初期と思はるゝもので、その奥書には(5)「吐漢

對照西域地圖與書の文」に列舉せるが如く、「以實相坊御本、一勘了」云々……眞圓記。「正治二年

云々、禪覺記之」、「承久二、十二月……圓淨記」とあつて、書體は鎌倉時代風のものである。

その後博士は高楠博士へ貸覽されてゐたところ、先年の東京の大震災にかゝつて焼失したとのこ

とにて、高楠博士よりその代本として松本博士へ返送されたものは、即ち本誌に掲ぐる寫眞版「吐漢對照西域地圖」はこれである。題號に

六紙様

第九、禪覺筆移寫
正治二年奥書

とあり、六枚の竹葉紙に模寫せるものなるが故に「六紙様」と名けたものであらう。「様」とは奥書に「凡此繪様、梵字等不分明也……眞圓記」とある文意に據つたものであらう。この「六紙様」本は奥書に「明治二十三年十月、近江源晋模寫」とあり、此の所藏家南部甚助（滋賀縣東淺井郡河木村）といへる人は、「臨時全國寶物取調局」へ呈出せしところ、明治二十六年十一月十三日附を以て、「右美術上ノ參攷トナルヘキモノト認定ス」との鑑査狀の下附を受けたのである。但し表紙の内面の左下の處に「南部家藏」の赤印を捺さしてあり。若し此の「六紙様」本の底本となつた原地圖（軸物）が鑑査に附せられたならば、鎌倉初期時代の紙質と書體とにして、「久應二、十二月二十六日以御藏本、一校了、圓淨記」（書）とあるから、審調上の價值も認められたであらうと思はれたれど、「圓淨記」の眞本の焼失したことは、かへすくも惜しむべきことである。余は「圓淨記」の卷軸を引寫して保存してゐる。

この奥書にある「實相坊」とは如何なる人であるか不明である。恐らくは園城寺派の學僧ではなからうか。本地圖は「實相坊」筆（？）のものと、尙別の模寫圖との二種あつて、眞圓は此の二種を對校

せしも、「此繪様、梵字等不分明也」、「重以藏本、交了、但不及力、字者無術之、眞圓記」として與書したのである。若し然りとせば是等二種の模寫の底本となつた原圖が存してゐたことが推測せらるであらう。されば其の原本は何人が唐朝より將來したのであらうか。

當時此の南部家藏本（六紙様本）を鑑定せし寶物取調局委員は山名貫義、橋本雅邦、岡倉覺三、川田剛、九鬼隆一の諸氏を連ねてゐる。そして此の「六紙様」本に就て南部晋氏（南部基助の子息）は其の鑑定を小杉楳郵氏（當時の國文學者）に依頼せしところ、小杉氏より南部氏宛の返信一通あり（明治二十四年四月二十四日東京郵發、同月二十二日、近江、速水消印）本書の最後に合綴して保存されてゐる。その小杉博士の返信によれば左の如し。

「然るに翌年二月七日淨信寺にて再檢の時、前書無名の一巻、「以實相坊御本」云々は甚助氏所藏の由にて又陳列す。……さて奥書の内に御質問の禪覺は、いづれの方が心得不申、法隨寺五師の内の禪覺同名あれども、果して同人か、未だ確證無之、時代は大體同時と勘考致し、往生もかやうの事は取調が職掌に候ても、いまだ取まとめかれ居候。……」

尤もこれらの原本は、當今國城寺に原本と寫本と二部有之、「五部心觀」と題名ありて、圓珍將來のものに御座候。御所藏の奥書にも其意味見えたるを今回添へて御送致の「淡海興地志略」の三井寺の條下の文に、「金胎兩部曼荼羅の像」云々とあるは、果してこの圖像かしらず、恐らくば眞の曼陀羅といふ大體のものにてはなきか。

但し右の「五部心觀」も、かの唐院入のものに御座候。この三井寺の（圓）珍將來のものを原本とするは、奥書に、「此無畏和上眞也。興采色異也。可_レ據_二色本_一傳教大阿闍梨、手中主持本、特分_二付弟子智金剛_一、此圓珍法號也、六會具足也_{（九年中）}」とありて、法金の像もふがたき、實にめづらしきものに御座候。

此類の部分とおぼしきもの京都東寺觀智寺にも、うつしを一卷見たり」云々。

禪覺の史傳は不明なれども、禪覺の寫本と、その原本の二部は當今園城寺に存し、「五部心觀」と共に圓珍將來のものなりと小杉博士は鑑定されたのである。是に據て禪覺寫本の吐漢對照西域地圖は智證大師圓珍の將來なることを推定さる。圖珍は智證大師にして西紀八百十四年生れ、同一千五百五十一年死す。傳教大師の弟子である。

この「五部心觀」も圓珍の將來なることは、「智證大師全集」第四卷〔大日本佛教全集〕 〔集〕 p.1284 に傳教大師より授かつたものであるとしてゐる。曰、

五部心觀批記

外題曰、

惺多僧薩哩、五部心觀一卷。

考以下大師親筆

此本是青龍和上、手中本、分付圓珍。

同卷末、無畏和上像。背曰

此無畏和上眞也。與采色異也。可據眞本。

同奥書曰

傳教大阿闍梨、手中主持本、特分付弟子、智金剛

此圓珍法號
六會具足也
九年中

右托記敬長師模寫本ニテ依抄出。唐院御經藏祕襲真模二本存。ヲス

五部心觀一卷は圖珍が入唐して青龍和尚より直接授けられたものなりと云ふ。小杉博士書翰中の「五部心觀」も此の「智證大師全集」中の文に據つたものであらう。

南部晋氏舊藏の古寫本中に、「五部心觀抄寫」あり、その文に曰、

建久五年正月晦日、二月一、二、三、四、五日、並六ケ日間、請出大寶院御本、釋迦院僧正本也

於三井寺〔 〕上花房面寫了、但御本、梵字形不分明、仍今推以出寫之、完謬故、後日必之〔 〕可言、交合之了。

以藏本一校

禪覺記之。

重以藏本

圓淨記。

この吐漢對照地圖と五部心觀一卷とは、共に圓珍の將來なりとせば、そは平安朝末期時代のものであると言ふことは、以上の引證に依つて一應は承認することゝせむ。而して此「但御本梵字形不分明」とあるは、「五部心觀」が或は吐蕃語にて書いてあるが爲めではなからうか。後日の研究に譲ることゝせむ。

次で眞圓、禪覺、圓淨は如何なる人であらうか。是等の三人は等しく圓珍を祖とする「天台宗遮那業相承系譜」中に列せられてゐる鎌倉初期の輩出である。同系譜（佛光大年表）に曰、（望月氏著）

我が國史と吐蕃との關係

圓珍

行圓——賴豪——行勝

良住——眞圓——禪覺——圓淨——仁曜

空海の弟子にも眞圓なるものあり、弘仁四年十二月(嵯峨帝、空海高野山を開く、西紀八一三)に侍講に擢でられたといふ(弘法大師、譜。佛敎人名字書)。併しこの西域地圖を移寫した眞圓は、同名異人であることは、圓珍の遮那業相承系の人であるに依ても知らるであらう。

次に禪覺の略傳は「三井續灯記」(佛敎人名字書七百十二頁)に曰、

「禪覺は天台宗近江園城寺の別當なり。禪覺は郷貫詳ならず。天仁三年五月(西紀一一〇年)寂勝の講に聽衆と共に侍し、承元三年六月二十七日別當に任じ、四年四月七日拜堂。建保二年二月十一日(西紀一一二一年)寂す、壽缺く」とあり。此年法然上人示寂す。

次に圓淨の略傳は「三井續灯記」(佛敎人名字書九百三十五頁)に曰、

「圓淨は天台宗近江園城寺の長吏なり。俗姓は藤原氏、基道の子なり、建長九年正月十九日、恒恵に就て落髮受具し、覺朝に従ひ密法を受け、禪覺を拜して密灌を受け、又長舜に謁して天台、俱舍等を學び、六勝寺の別當、三井の長吏、宇治法城寺執事等の諸職を経て、法務に任じ、大僧正に任ず。寛喜元年四十一歳にして大阿闍梨位に登り、康元元年四月十九日寂す、壽六十八。」次に圓淨の略傳に曰、

「世姓藤氏、亟相基通の子也。母白光の口中に入るよと夢み、因て身あり。文治五年己酉生（西紀一二八九年）。建久九年正月十七日、恒惠の室に入る。十九日落髮し、受戒す。覺朝に隨ひて密法を受け、釋覺を拜して密壇に入る。又長舜に遇ひ天台を學び、俱舍並に決集を授かる也。建長八（康元年）四月十九日（西紀一二九八年）、手に大日印を結び、口に五字明を誦して寂す、六十八歳なり。」

本稿を草するに付て、松本博士は我が國史上最も貴重なる吐蕃語の西域地圖の史料を御貸與下され、是に依て我國史と吐蕃との史的關係を聊か闡明し、研究の一端を纏めることを得たるは、專に博士の研究依囑の賜なれば、茲に深く謝意を表する。

尙高麗朝の「資稿院鐘銘」の拓本は、龜田教授の厚意に依て譯讀するを得たのである。その他研究史料や御注意を大屋、泉、小野各教授より受けて稍く此の一篇を作することを得たのである。謹で其茲にの御厚意を謝する次第である。（昭和六年十二月二十四日）（完）